

# 鍵盤に魔法を

調律師 鈴木均が語る

調律師なのに30歳ごろまではピアノ曲を聴くのが苦手でした。40年ほど前、名古屋・伏見にあった名古屋音楽学校の仕事をしていた。毎夏、欧州各国から著名な指導者を招いた1週間連続の公開レッスンが開催されていて、仕事を兼ねて「門前の小僧」で同席したことがあります。

シューマンの幻想曲や幻想小曲集をモデルのピアニストが弾いた後に通訳付きでレクチャーするのを、地元のパテラン先生たちが「ヘンレ社版」の輸入楽譜を開いて集中して聴いているんですね。それまでの日本のレッスンは「速く、だんだんゆっくり」とか鍵盤への振り付けレベルでした。ここでは「このフレー

## 曲の「意味」知るうちに…

ズは精霊たちが踊るのをイメージして」「悪魔が顔をのぞかせる音」と鍵盤に演技をさせる指導なんです。しかもドビュッシー、ラヴェルに直接学んだ弟子の、孫弟子に当たる人たちが弾くので、出す音がまるで違う次元。門外漢の僕ですら「なんときれいで表情豊かな」と、奏でられる音にうっとりさせられました。ピアノ音楽の意味が分かり、小難しいと避けていた偉大な作曲家の長いソナタが面白くなるわけですね。

## 修業時代 ⑤

楽譜を見ながら聴く、という経験も新鮮でした。「CDウォークマン」の登場により、通勤電車でもよくミニチュアスコアを片手に旋律を目で追っていました。音の動きがよりリアルにイメージでき、時には気になった部分を仕事中に鍵盤で弾いてみました。

担当する演奏会の曲を前もって聴いておく、ということもやっていました。

「3楽章のこの辺で難しいところがありますよね」と言うだけで、ピアニストは「この曲を知っているんだな」と思って「コミュニケーションも取りやすくなる。もちろんそういうことをうるさく思う人もいますし、曲を知っていることと、いい仕事ができるのは違うけれど、俳優でタレントの黒柳徹子さんが、番組などで対談相手のことを事前に深く調べるのと同じだと思います。(聞き手・南拡大朗)



CDを聴きながらよく読んでいた楽譜